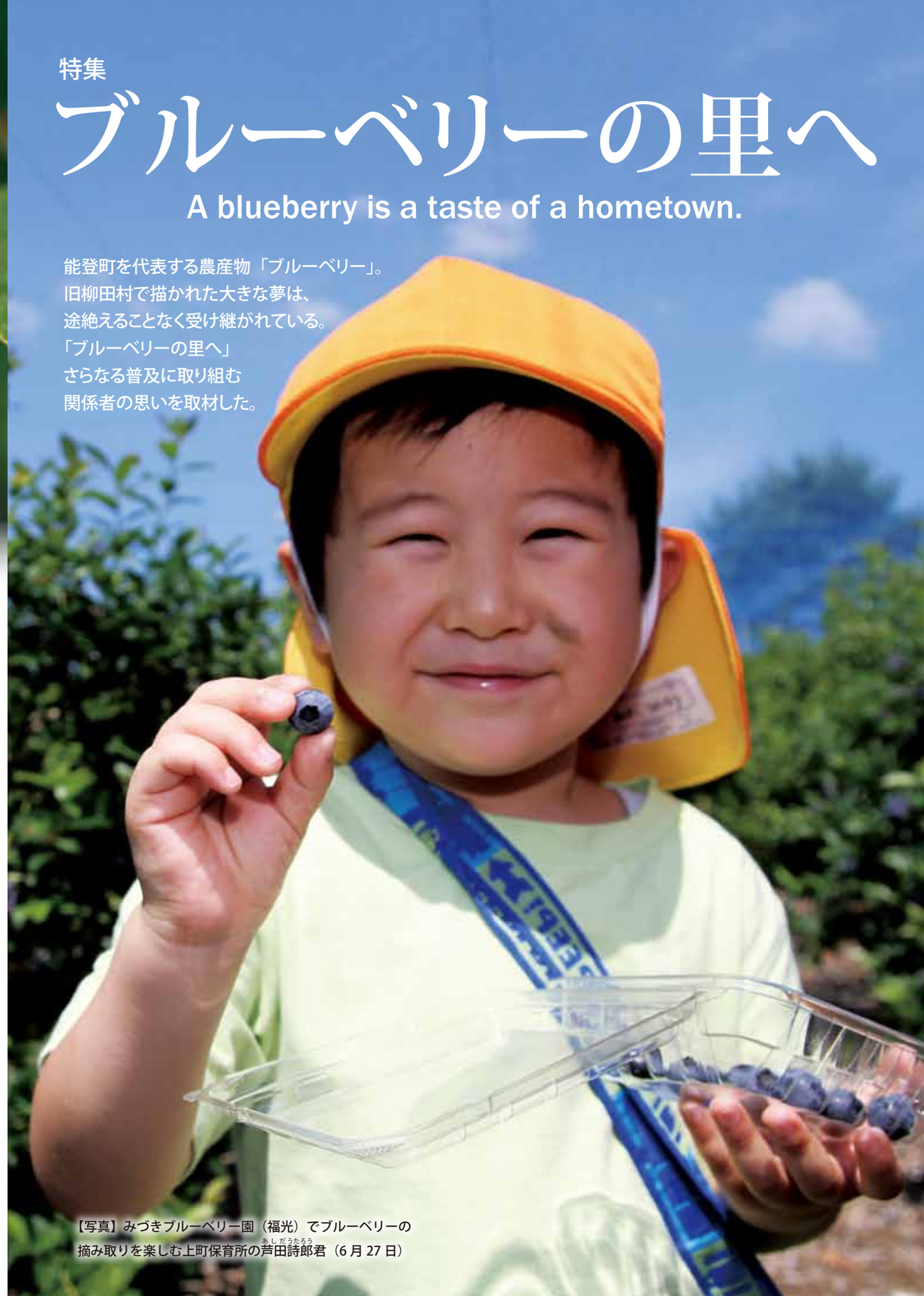
特集

ブルーベリーの里へ

A blueberry is a taste of a hometown.

能登町を代表する農産物「ブルーベリー」。
旧柳田村で描かれた大きな夢は、
途絶えることなく受け継がれている。
「ブルーベリーの里へ」
さらなる普及に取り組む
関係者の思いを取材した。



【写真】みづきブルーベリー園（福光）でブルーベリーの摘み取りを楽しむ上町保育所の芦田詩郎君（6月27日）

ブルーベリーを知る

早生はハイブッシュ系 晩生はラビットアイ系

ブルーベリーはツツジ科スノキ属に分類されるアメリカ原産の落葉低木果樹。その果実が美しい青色になることから「ブルーベリー」と呼ばれている。

日本で生産される品種には、冷涼地向きで酸性土壌を好み、収穫が初夏になる「ハイブッシュ・ブルーベリー」と、関東から九州まで栽培でき、収穫が夏から初秋になる「ラビットアイ・ブルーベリー」がある。ハイブッシュ種とラビットアイ種を組み合わせることで、6月中旬から9月下旬までの長い期間収穫できる。

生で食べることができる安心の果実

ブルーベリーの特徴は、農薬を使わずに栽培するため、収穫してそのまま食べられること。果皮ごと食べるために、果実に含まれる豊富な栄養素が無駄なく摂取できる。

生食を基本としながら、ジャムやワイン、洋菓子など、さまざまな加工食品の原料としても利用される。一粒の重さは1～3グラム。近年は品種改良によって百円玉ほどの大きさの品種も出てきている。

植物としては▽春の芽吹き▽白い可憐な花▽新緑の美しさ▽青い果実▽秋の紅葉と落葉―など、四季の変化を堪能できる。鑑賞価値も高く、庭木や垣根として植えている人も多い。

アントシアニン色素が目に良い効果を

ブルーベリーの青色はアントシアニン色素の色。目に良いと言われている成分で、ブルーベリーには15種類のアントシアニンが含まれている。

その他にも、果樹の中で2番目に多い植物繊維や高い抗酸化作用をもつ成分などが含まれ、生活習慣病の予防にも効果が期待されている。

ブルーベリーの代表的な品種

デューク（Duke）
（ハイブッシュ系の早生品種）

樹姿は直立性で樹勢は旺盛。果実生産力は安定して高い。成熟期が揃うという特徴がある。果実は中粒から大粒。果粉が多く、果皮は青色。味はしっかりした、食べ応えのある味。
収穫期は6月中旬～7月上旬ごろ

ブルークロップ（Bluecrop）
（ハイブッシュ系の中生品種）

世界の標準品種で、能登町でも多く栽培される。樹姿は直立性で樹勢は中位。果実生産力は安定して高い。果実は中粒から大粒で収量が多い。果皮は明青色。甘さと酸味のバランスが良く、風味も非常に良い。収穫期は7月中旬～7月末ごろ

ティフブルー（Tifblue）
（ラビットアイ系の極晩生品種）

世界で最も広く栽培されている。樹姿は直立性で樹勢は旺盛。果実生産力は非常に高い。果実は中粒で果粉が多く、果皮は非常に明るい青色。風味が非常によく日持ち性も良い。
収穫期は8月下旬～9月下旬ごろ

ブルーベリー産地への道

駒寄美和子（こまよせ）さん　上野茂子さん

旧柳田村で初めてブルーベリーが栽培されたのは、今から29年前。駒寄孝造氏（こまよせ）が筑波大学から持ち込まれたブルーベリーの苗木を田代地内の農場に植えた。ここからブルーベリー産地への挑戦が始まった。

ブルーベリーという選択

「柳田村を将来、ブルーベリーの里にしたい」

平成元年12月、能登ワイン『猿鬼伝説』の完成を受けて、当時の農協組合長・駒寄孝造氏はこう抱負を述べた。

この年、集団転作で栽培総面積が3・2㌶に拡大した。翌年には、駒寄氏を会長とするブルーベリー研究会（現在のやなぎだブルーベリー生産組合）が設立。本格栽培を目指した研究会の発足は、ブルーベリーの産地化に向けた大きな一歩となった。

駒寄氏とブルーベリーの出合いは昭和58年。当時商工会長をしていた駒寄氏は、新たな村おこしの材料として数百㌶という開発農地に植えられる作物を探していた。

そのころ、知人を通して紹介された筑波大学からブルーベリーの情報が寄せられた。大学から苗木を取り寄せ、自費を投じて田代地内に農場を開設。さらに当目地内の山を切り開いて田代の苗木を移植し、栽培実験を進めた。

農協組合長となった昭和62年から3年間は、ワインの商品化や集団転作による団地化などに情熱を注いだ。

駒寄氏が描いた『ブルーベリーの里』という夢は、多くの人に受け継がれ現実となっていった。

新しい道を切り開く

「未知の世界にチャレンジしてくれた先代に感謝しています」

当目地内に開拓された農場は、現在も「駒寄農場」として駒寄美和子さんが受け継いでいる。40㌃の敷地に580本。中に入ると目に入るひときわ太い木は、29年前に植えられたブルーベリーだ。農場の管理は主に美和子さんと従業員の上野茂子さんが行う。

「ここは雪害が多くて1本当たりの収量は少ない。だからこそ実がなった姿を見るとうれしくてわくわくします」と話す美和子さん。

「ブルーベリーはモデル農場や柳田食産があり、栽培技術や販路の心配がいらないので農家として恵まれた環境と言えます。やり方次第で十分成り立つので、若い人や女性にも頑張ってほしいですね」

駒寄農場は5年前からオーナー制を導入。外の人に喜んでもらうことに『農業の原点』を感じているという。

「農家としてのプライドを持ち、おいしくて安心して食べられるものを追求することで付加価値を生み出したい」と信念を持つ美和子さん。先代の意志を継ぎ、さらに新しい道を切り開いている。

故駒寄孝造氏（平成3年没・享年72歳）
昭和51年～63年に柳田村商工会長、昭和62年から平成元年に柳田村農業協同組合組合長を務め、ブルーベリーの普及に情熱を傾けた。

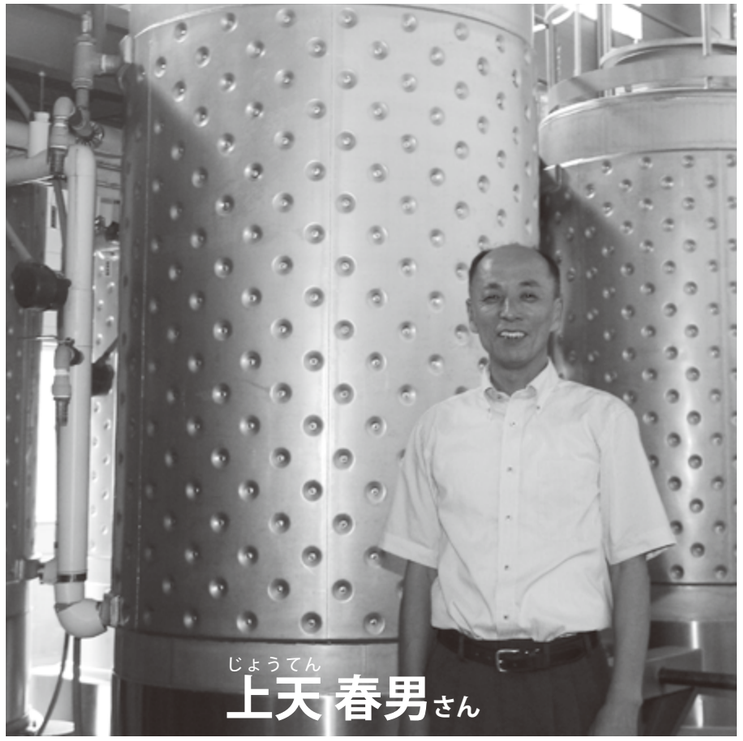
【駒寄農園】
Address：能登町字当目
Tel：76-0252
駒寄孝造氏が29年前に植えた木も残る、町内で最も古いブルーベリー園。

ブルーベリーの歩み
（やなぎだブルーベリー生産組合資料から抜粋）

1983（58）　故駒寄孝造氏が筑波大学からブルーベリー栽培に関する情報を入手。
駒寄氏がブルーベリー農場を開拓し、栽培を始める。（田代地内）
1987（62）　ブルーベリーワインの試作実験始まる。
1989（元）　能登ワイン「猿鬼伝説」販売。
集団転作で栽培面積拡大。（田代・五十里地区）
1990（2）　柳田村ブルーベリー研究会発足。（会員数24）
1991（3）　㈱巨峰ワインへ醸造試作研究業務を委託。
「ブルーベリー村整備構想」を策定。
1992（4）　駒寄ブルーベリー園で摘み取り園を開始。
モデル農場で苗木の生産を開始。
セミナーハウス「山びこ」でジャムの製造、販売を開始。
1993（5）　「全国ブルーベリー祭り」を植物公園で開催。
1994（6）　モデル農場で果実の集荷、販売を開始。（出荷農家数7戸）
1995（7）　「柳田食産株式会社」が設立。
ブルーベリー園の防鳥設備導入事業を開始。
新規栽培農家への助成事業を開始。
1996（8）　ラビットアイにハイブッシュの接木での品種更新普及を開始。
柳田食産㈱で果実の集荷、販売業務を開始。
1997（9）　「柳田ブルーベリーワイン」誕生試飲会。
1998（10）　石川県農林水産業功労者知事表彰受賞（ブルーベリー研究会）
1999（11）　木材チップ活用実験、使用開始（モデル農場）
ブルーベリー出荷組合を設立。
モデル農場で摘み取り園を開始。
2003（15）　木材チップの使用管理基準を認定、周知。
2004（16）　第10回全国産地シンポジウム「ブルーベリーin能登半島」開催（500人参加）
能登産ブルーベリーの育種業務に着手。（モデル農場）
2005（17）　導入新品種の品質調査開始。
2006（18）　能都、内浦地区での栽培が本格的に始まる。
小学生を対象に食育事業に取り組む。
2008（20）　能登産ブルーベリーの育種業務の調査開始。（県農総研）
2010（22）　モデル農場が上町地内に移転。
2012（24）　全国産地シンポジウムin秋田へ参加。
MRO旅フェスタへ参加。（県産業展示館）
能登ふるさと博オープニングイベント参加。
第4回ブルーベリー収穫祭（7月8日）
ブルーベリー料理募集（7月8日～31日）
新商品の開発（能登高校）

ブルーベリーの可能性

果実の集荷・加工・販売を担う柳田食産㈱。品質の高い能登町産ブルーベリーの可能性を追求する。



上天（じょうてん） 春男さん

ブルーベリーの産地で生まれる加工品

地元産ブルーベリーを地元で加工する工場『きのみワイナリー』。加工品を作ることで、生産者の育成と産地化を進めていこうと平成8年に建設された。

「地元の皆さんに特産品として使ってもらって、きのみワイナリーを育ててもらった」と語る支配人の上天（じょうてん）春男さん。「寒暖の差がある能登町のブルーベリーは味に深みがあり、甘みと酸味のバランスが良い」と言い切る。

「ワイン、ジャム、ゼリーなど、どの加工品もブルーベリー本来の味と香りを生かすことにこだわっている。こだわり続けることでリピーターが生まれる」と商品にかける思いを語る。

能登町産ブルーベリーのブランド化を目指す

きのみワイナリーを運営する柳田食産㈱が生産農家から買い取るブルーベリーは昨年で約13トン。加工品のほか生や冷凍としても販売される。

柳田食産という販売先が確保されることで、生産者は販売ルートを探す必要がなく、安心して生産できる。ブルーベリー生産農家が増えていった要因の一つだ。

「生産者がいなければ会社は成り立たない。私たちが頑張ることで農家をサポートし、安心して作ってもらうことが大切。そのためにも、近くに移転してきた普及センターと今まで以上に連携・協力し、産地として一歩前進する体制を築いていきたい」と話す上天さん。

「『ブルーベリーなら能登』と言われるためには、産地として安定した生産量を維持していくこと。そして品質の良い商品を作り続けることが重要」と意気込みを見せる。

県内外で幅広い販売網を持つきのみワイナリー。その商品力と開発力が、『能登町産ブルーベリー』のさらなるブランド化の鍵を握っている。

【柳田食産株式会社】
Address：能登町字上町
Tel：76-8100
施設の愛称は「きのみワイナリー」。ワイン加工・販売、ジャム加工・販売、摘み取り体験、ジャム作り体験、ブルーベリー（生・冷凍）の販売などを手掛ける。

6月からラベルが一新されたブルーベリーの加工品

内浦地区福光でブルーベリー摘み取り園を開園して3年目

みづきブルーベリー園の挑戦

「ブルーベリーの可能性にかけた」

20㌶の広大な農地で、葉タバコ専業農家を営んでいた武藤（たけとう）利夫さん（57）＝布浦＝は平成22年、福光地内の農地の一角に『武藤農園みづきブルーベリー』を開園した。

「10年ほど前から葉タバコの将来性に危機感を抱いていた」と語る利夫さん。葉タバコの代わりになり、高齢でもできる作物として、悩んだ末にたどりついた答えが『ブルーベリー』だった。

「当時、父親が趣味でブルーベリー20本を植えていた。福光の気候とブルーベリーが合っていると感じ、妻と相談して決めた。町村合併したことも大きかった」と振り返る。

「どうせやるなら出荷農家ではなく、夢でもあった観光農園にしたい」と考えた利夫さん。モデル農場の指導を受けながら、3年を費やして60㌃の敷地に約1,000本の苗木を植えた。

利夫さんのこだわりは「大きさ、味、管理」。剪定（せんてい）や花を摘む作業を多くすることで、一粒一粒を大きくする。農園内はきれいに手入れされ、ヒマワリやパンジー、ラベンダーなどの花も来場者を迎える。

「試行錯誤を重ねて、3年で何とか形になってきた。今後の夢は、余裕を持ってお客さんとのふれ合いを楽しむこと。そのためにも、ブルーベリーだけで採算がとれるよう頑張りたい」

能登町を代表するブルーベリー園の一つとなった武藤農園。これからも夫婦二人三脚で、一粒一粒のブルーベリーに愛情を注いでいく。

広大な敷地に4つのブルーベリー畑。園内にはナスやジャガイモなども植えられ、摘み取り体験もできる。

ブルーベリーと並ぶ、もう一つの顔が「トウモロコシ」。もぎたてを生で食べることができる品種で、買い求めるリピーターも多い。

武藤（たけとう） 利夫さん
智子さん

摘み取りや選別は主に妻の智子さんが担当。ブルーベリー園は、夫婦の協力がなければ決して成り立たない。

【武藤農園みづきブルーベリー】
Address：能登町字福光
Tel：72-0481

ブルーベリーの さらなる普及へ

農家への普及と指導を担ってきたモデル農場が上町地内に移転し「能登町ブルーベリー普及センター」となった。産地として、さらなる普及を目指す。

チップ栽培を確立

「モデル農場として、これまで培ってきたノウハウをすべて教えている。失敗することはほとんどない」

能登町ブルーベリー普及センター職員、中山幸永（ゆきなが）さんは自信を持ってブルーベリー栽培を農家に勧めている。

普及当初、能登の土に合わないとされたブルーベリー。しかし、モデル農場の元農場長・田原義昭さんが試行錯誤の末、国内で初めて木製チップによる栽培法を確立。これにより、土壌が原因で枯れるという失敗はなくなった。

「植栽から成木になるまで7、8年かかるため、始めるのであれば40代や50代で植えることができれば理想的」と話す中山さん。普及への最初の壁は『初期投資』だという。

中山さんによると、夫婦二人で管理するには10㌃から15㌃に約２００本が理想で、この場合の初期投資が約80万円。成木となって全量を柳田食産に出荷した場合で約70万円、週末に摘み取り客を入れたり、生で販売したりすれば、２００万円以上の売り上げが見込めるという。

「初期投資はすぐに回収できる。管理は主に剪定や肥料のみで、機械や農薬がいらない分、田んぼに比べて手間はかからない」

北陸最大の産地として

普及センターは、生産者で組織する『やなぎだブルーベリー生産組合』の事務局も兼ねる。現在の組合員は約90人で、本格的普及から20数年が経過し農家の高齢化が進んでいるという。

「相談から指導まで、呼ばれればいつでも伺うので、興味がある人はぜひ連絡してほしい。新規に始める人が増えないと、能登町産ブルーベリーを守ることはできない」

献身的な指導で農家を支え続ける普及センター。北陸最大の産地として、さらなる普及に力を注いでいる。

【能登町ブルーベリー普及センター】
Address：能登町字上町
Tel：76-0014
苗木作り、農家への普及と技術指導、品種研究などを手掛ける。

3年生の苗木。植栽は主にこの大きさで、樹齢10年になると1本あたり3～5㌔が収穫できる。

中山 幸永（ゆきなが）さん

ブルーベリーの花（5月中旬）

青い粒は、ふるさとの味。
『ブルーベリーの里』を
もう一度見つめ直したい。

6月、町内に点在するブルーベリー園に青い網が掛けられる。今では能登町の原風景。ブルーベリーの収穫が近いことを教えてくれる。

これまで、産地化を目指して数多くの作物が栽培されてきた。その多くが失敗に終わる中で、ブルーベリーが成功した理由は、駒寄孝造氏を始めとした多くの人の情熱と農協や行政などの力を結集できたからだ。

「ブルーベリーでワインを作って新たな特産品としたい」

その目標が生産の拡大につながった。

「ほかのまねではなく、今までにないワインを作ろう」

その努力が多くの消費者の支持を得てきた。

増え続ける全国の産地の中に埋もれてしまうのか、『能登町産ブルーベリー』としてさらに光輝くのか―。

もう一度、みんなの知恵と力を結集する必要がある。